

大学生の外国志向と外国語教育

鈴木, 右文
九州大学言語文化部言語科学部門

<https://doi.org/10.15017/6796362>

出版情報 : 言語科学. 31, pp.103-108, 1996-02-26. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



大学生の外国志向と外国語教育

鈴木右文

1 序

本論の目的は、現代の大学生が持つ世界の地域・国々に対する志向がどのようになっているのかを概観し、それをどのように解釈したらよいか考察し、その実態をふまえた大学における外国語教育がどうあるべきかを論ずることである。^{注1} 考察の対象となるデータは言語文化部のある国立五大学の学生の物であるが、学生一般のものと見なして論を進めることとする。また大学間の差異として、九州大学と北海道大学の比較にもふれる。

2 地域差

資料（以下資料と言った場合は注1で言及したものを指し、いちいち提示しない）によれば、世界の地域ごとに学生が抱いている感情は表1のとおりにまとめられる（質問5①、6①、11①）。^{注2}

表1

| 親しみ | アジア | オセアニア | 旧ソ東欧 | ヨーロッパ | 中近東 | アフリカ | 北中米 | 南米 |
|------|------|-------|------|-------|------|------|------|-----|
| 九大 | 371 | 157 | 33 | 332 | 12 | 18 | 318 | 36 |
| 北大 | 487 | 191 | 35 | 345 | 24 | 35 | 334 | 42 |
| 五大 | 2235 | 807 | 136 | 1642 | 80 | 95 | 1601 | 223 |
| 疎遠 | アジア | オセアニア | 旧ソ東欧 | ヨーロッパ | 中近東 | アフリカ | 北中米 | 南米 |
| 九大 | 289 | 34 | 210 | 99 | 208 | 113 | 234 | 60 |
| 北大 | 289 | 34 | 208 | 99 | 238 | 133 | 227 | 72 |
| 五大 | 1431 | 284 | 1170 | 454 | 1141 | 630 | 1161 | 299 |
| 交流希望 | アジア | オセアニア | 旧ソ東欧 | ヨーロッパ | 中近東 | アフリカ | 北中米 | 南米 |
| 九大 | 227 | 105 | 32 | 334 | 6 | 30 | 210 | 21 |
| 北大 | 293 | 137 | 59 | 320 | 21 | 57 | 230 | 40 |
| 五大 | 1325 | 563 | 204 | 1574 | 70 | 157 | 1028 | 121 |

親しみがアジア、ヨーロッパ、北中米の順で多い。アジアは日本が所属する地域であるから当然であり、ヨーロッパと北中米は今更指摘するまでもない欧米志向の現れである。

疎遠感が親しみと対照的になっていないように見える地域としてアジアと北中米が注目されるが、これはそれぞれ北朝鮮（九大160 北大185 五大 869）と

^{注1} 本論で言及するデータは、「大学生と異文化接触 - 国立五大学言語文化部（北海道大・東北大・名古屋大・大阪大・九州大）大学生の異文化接触（文化摩擦と国際理解）の実態および意識調査 -」（1995年・北海道大学言語文化部編）の基礎となっている。1995年はじめに上記五大学の1年生に対して実施されたアンケートから導き出したものである。内容やその他の詳細は本誌綴じ込みの資料を参照。

^{注2} 表1の数字は国ごとの数値を合計して地域の数値とみなしたものである。

エルサルバドル・グアテマラ（2国合計で九大157 北大121 五大713）が原因となっている。前者は政治体制、後者は情報不足（知名度の低さ）によるものと思われる。詳しくは4節で取り上げたい。

交流を希望する地域では、親しみを感じるほどには交流を望まない地域というのがあり、アジア（五大で親しみ2235 に対し交流希望1325）と北中米（五大で親しみ1601 に対し交流希望1028）がそれにあたる。前者ではほとんどの国において同様の傾向が見られるので、交流希望がなくても日本の所属している地域だからということによる単純な親近感を持つ学生がかなりいるようである。後者ではアメリカ合衆国だけがこの傾向を示して（五大で親しみ1429 に対し交流希望809）北中米全体の数字を左右している点がアジアと異なる。この点に関しても4節で取り上げたい。

逆に親しみ以上に交流を希望する地域は旧ソ連東欧地域（五大で親しみ136 に対し交流希望204）とアフリカ（五大で親しみ95 に対し交流希望157）である。どちらも経済的に有望な発展途上地域と考えられてのことであろう。

3 地域差から見た外国語教育の姿

以上、地域単位のデータを見たときに、外国語教育の進むべき方向としてどんな点が見えてくるだろうか。外国語を国際コミュニケーションのツールとして捉える場合、学生のニーズにあった外国語教育が推進されるのがもっとも望ましいと考えるならば、学生が交流を望む地域で使用される言語をメニューにそろえることが必要となる。とすれば、やはり旧来の欧米の言語、それに加えてアジアの言語というところははずすことができない。

ところが、この線というのは、結局従来大学が供給してきた線そのものである。これを維持強化するということが十分なのであろうか。他の地域の言語は黙殺してしまってもよいのだろうか。とてもそのようには思えない。

昨今、既存の外国語科目の中に授業タイプの2分化が進んでいるように思える。例えば東京大学では、英語が大人数クラスで各学問への橋渡しになるような統一教材を使用する英語Ⅰと特定の技能を少人数クラスで訓練する英語Ⅱに分かれている。²⁸³ いわば教養的側面と技能的側面に分けた形である。言語の品揃えを考える際にも、この観点が必要ではないだろうか。すなわち、学生の交流希望にそって実践的語学力を中心に据えた欧米系・アジア系の言語を用意する他に、教養的側面を考慮して、それ以外の地域の言語もなるべくメニューに盛り込むべきだと思われるのである。大学における一般教養科目として位置づけられる外国語科目では、ニーズの高い言語の運用力養成だけが行われるのであれば、市井の会話学校と変わりが無い。自分の母語及びツールとして習得する言語のみ見ていたのでは、言語の多様性、自分と異なるものに対するあるべ

²⁸³ 筆者は95年11月末に東京大学と慶應大学湘南藤沢キャンパスにおける英語教育の視察を行った。関係各位に改めて誌面を借りて御礼申し上げます。

き態度といったものが見失われる恐れがあるのではないだろうか。資料によれば（質問5③、6③）、大学生の情報源はほとんどテレビである。軽薄な情報番組だけから偏った情報を得るのは真の教養と言えない。現に外国語を1か国語に限定してインテンシブな運用力養成に大きな力を注いでいる代表格の慶應大学湘南藤沢キャンパスでも、教養外国語と称して、インテンシブなコースで選択した語以外の言語を履修する枠を設けている。もちろんニーズの少ない語を多種開講するのは困難である。従って、近隣の大学が少しずつ負担しあって単位の共通化を図るなど、大学間の調整を期待したい。学生の移動に問題があれば、休業期間中に集中コースとして開講するなどの方策が考えられる。

4 国差

資料に基づいて大学生が抱えている感情を国別に10位まで挙げると表2のようになる。^{注4}

表2

| | | | | | | | | | | |
|----|------|---------|---------|---------|---------|---------|------|------|-----------|--------|
| 親 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 九大 | アメリカ | オーストラリア | 韓国 | 中国 | ドイツ | イギリス | フランス | イタリア | 台湾 | ブラジル |
| | 294 | 142 | 124 | 122 | 113 | 89 | 42 | 28 | 25 | 18 |
| 北大 | アメリカ | 中国 | オーストラリア | 韓国 | ドイツ | イギリス | フランス | カナダ | ニュージーランド | インド |
| | 281 | 178 | 147 | 116 | 105 | 85 | 44 | 44 | 37 | 34 |
| 五大 | アメリカ | 中国 | オーストラリア | 韓国 | ドイツ | イギリス | フランス | 台湾 | ブラジル | イタリア |
| | 1429 | 858 | 683 | 628 | 482 | 405 | 247 | 168 | 157 | 155 |
| 疎遠 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 九大 | 北朝鮮 | ロシア | イラク | グアテマラ | エルサルバドル | ルクセンブルク | 旧ソ除露 | バレーン | 旧ユーゴ | アメリカ・他 |
| | 160 | 114 | 97 | 81 | 71 | 34 | 33 | 30 | 30 | 29 |
| 北大 | 北朝鮮 | イラク | ロシア | グアテマラ | バレーン | エルサルバドル | 旧ソ除露 | アメリカ | アイスランド | 南アフリカ |
| | 185 | 85 | 77 | 63 | 60 | 58 | 50 | 45 | 33 | 33 |
| 五大 | 北朝鮮 | ロシア | イラク | グアテマラ | エルサルバドル | バレーン | 旧ソ除露 | アメリカ | パプアニューギニア | イラン |
| | 869 | 576 | 427 | 360 | 353 | 273 | 225 | 177 | 161 | 144 |
| 交流 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 九大 | アメリカ | 中国 | イギリス | オーストラリア | ドイツ | フランス | カナダ | 韓国 | イタリア | スイス |
| | 169 | 117 | 94 | 90 | 86 | 63 | 36 | 35 | 22 | 21 |
| 北大 | アメリカ | 中国 | オーストラリア | ドイツ | イギリス | カナダ | フランス | ロシア | インド | 伊・韓国 |
| | 160 | 123 | 99 | 72 | 70 | 61 | 59 | 41 | 40 | 31 |
| 五大 | アメリカ | 中国 | オーストラリア | イギリス | ドイツ | フランス | 韓国 | カナダ | ロシア | イタリア |
| | 809 | 596 | 448 | 411 | 345 | 296 | 217 | 184 | 145 | 137 |

親しみを感じる国はやはり北米、ヨーロッパ、アジアの国々である。昨今新しい観光地としてそのフレッシュさが注目されているオーストラリア、ニュージーランド、カナダがベストテンに入っている。ブラジルが入っているのは最近のJリーグブームを反映してのことではないかと想像できる。

^{注4} 疎遠九大10位はアメリカの他にリビア、プエルトリコが同位。

一方疎遠に感じる国々では、北朝鮮を筆頭に、ロシア、ロシアを除く旧ソ連地域諸国については（旧）共産圏という政治体制上の理由によると思われる。また、イラク、イラン、旧ユーゴは最近紛争があった地域である。この他グアテマラ、エルサルバドル、バーレーン、ルクセンブルグ、パプアニューギニアといった国々は注意を要する。これらの国々は学生がその実態をよく知らないために疎遠と判断したのであり、政治や戦争を理由にしての積極的な違和感とは次元が異なると思われる。更に注意したいのは、これらの国々はたまたまアンケートの選択肢に含まれていたから選択されたのであって、選択肢に含まれていない知名度の低い国々が他にいくらかもあるという点である。従って、ベストテンに入ったものの、これらの特定の国々について云々することは的外れであるということになる。他に注目したいのはアメリカである。親しみでも交流希望でも断然トップであるアメリカが、疎遠感のベストテンにも顔を出している。共産圏と対峙したアメリカであるから政治体制を理由にしてのことは考えにくいから、世界の警察と称して数々の紛争に介入し、時には大きな誤りを犯して来た姿を学生が批判的に捉えたという側面が考えられるだろう。その他、銃社会、麻薬、エイズなどの社会問題を見て、資本主義社会の目標と仕切れない面に対する抜きがたい警戒感があるということも本当のところだろう。

交流を希望する国々は親しみを感じる国々とよく似ているが、九州大学（21）と北海道大学（41）のロシアについての差が興味深い。²⁵ 学生数が少ないので有意な差ではないかもしれないが、地理的にロシアと近く、現に交流が深く、これからもつながりが深まっていくことが予想される北海道の学生が九州の学生よりもロシアに関心があるのは当然のことである。しかしこれに対して九州の学生（35）が北海道の学生（31）よりも韓国に対してより大きな関心を寄せているとは言いがたい。資料をよく見ると、地理的近さもさることながら、「北」というものに対する親近感があるのではないかと思われる。というのも、「北欧」3か国を合わせた数字を比較してみると、表3のようになるのである。

表3

| 北欧3か国 | 親しみ | 交流希望 |
|-------|-----|------|
| 九州大学 | 11 | 15 |
| 北海道大学 | 32 | 30 |

5 国差から見た外国語教育の姿

以上、国別のデータを見たときに、外国語教育の進むべき方向としてどんな点が見えてくるだろうか。それは、日本という特定の環境に生まれ育ったことに由来するものの見方、感じ方のチェックという点であると主張したい。

²⁵ アンケートに回答した学生数は九州大学で459人、北海道大学で511人であるから、1割程度しか変わらない。それに対し、ロシアの数字はほぼ倍である。

親しみを持つ国々、交流を希望する国々を言語で眺めてみると、(五大の親しみ10、交流10のべ20について見ると) 英語7、中国語3、韓国語2、ドイツ語2、フランス語2、イタリア語2、ロシア語1、ポルトガル語1となり、ほぼアジアと欧米の言語ということになる。特に英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語は従来国立大学の一般教養として教えられてきた言語であり、そのことが学生の外国志向に大きな影響を与えている。資料(質問5③)を見ると、親しみがあると判断する判断材料は、表4のとおり、テレビ(五大で2641)について授業が第2位(五大で945)なのである。

表4

| 親しみ情報源 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|--------|------|-----|-----|-----|-----|
| | テレビ | 授業 | その他 | 書籍 | 直接 |
| 五大 | 2641 | 945 | 928 | 749 | 525 |

テレビを中心にした偏った情報を洪水のように与えられている学生に対して、授業でも同様であればますますよりよい国際理解からは遠ざかってしまうだろう。親しみを持たない国に至っては、その理由の1位は情報不足(質問6②)であり、その判断の情報源が圧倒的にテレビ(質問6③)であることからすると、テレビに出ない国は親しみを持たないということになり、1民間機関であるテレビ局の方針が学生の諸国に対する疎遠感を作り出すと言える。また、親しみを持たない理由の2位にあがっている政治体制については、ノンポリ、政治に無関心と言われる学生が政治体制を理由によく知らない国を敬遠してしまうというのは、考えてみれば恐ろしいことである。こうなってくると、授業から親しみを持つという学生の特質がある以上、どうしても言語のメニューの多様化や、従来から行われている授業の改善が必要となってくる。3節で提案した点を含めて、以下の提案を行いたい。

- ・ 少数言語を近隣の大学で少しずつ開講しあって単位を融通しあう
 - * 学生の移動に問題があれば、休業期間中の集中コースや夜間コースなども考えられる。
- ・ 話者人口ベストテン^{注6} にありながら軽視されているヒンディー語、アラビア語、ベンガル語、ポルトガル語を開講する
 - * 話者が多いからといって地域が広かったり、経済的影響力が大きいとは限らないけれども、経済力や領土の広さといった観点を大学の一般教養教育の場で隅から隅まで徹底させる必要はない。
- ・ 英語、ドイツ語などの既存の授業で、非欧米地域を取り上げる
 - * 例えば英語なら、イギリスやアメリカで話される英語をもっぱら前提とし、文化の紹介、歴史の学習についても然りである。しかしニュー

注6 「世界のことば小事典」柴田武編(大修館書店)による。

ジールランド、インド、シンガポール、フィリピンといった国々も無視されてはならない。

- ・国際理解の座標軸として、日本語学を受講させる
 - *自分の所属しているものを客観的に見る態度を養成するためには是非必要なことと思われる。従って、外国語科目という呼称は言語文化科目と改めたほうがよい。
- ・世界の言語や文化についての概説的講義を行う
 - *慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでは本格的な外国語科目は1年秋学期からで、1年春学期に諸国語概説を開講し、学生に履修する言語をじっくりと選ばせている。これも1つのよき試みである。
- ・英語以外の言語の履修を促す
 - *必要なら、英語以外を中心に履修する学生にメリットを与え、英語中心に履修する学生にはハンディを与えてもよからう。

6 終わりに

本論で利用したアンケートの回答内容や、そこから観察できることに関しては、特に目新しいものがあるわけではない。しかし、大学自体の改革、外国語教育の見直しという最近の流れの中で、たとえ教育学を研究領域とする者でなくても、教員一人一人が外国語教育がどうあるべきか、自分自身で考え、いかに稚拙なものと思われても、時にはそれを世に問うべきである。そうすることによって、本来担うべき責任の一端が果たされると思うのである。